

シリーズ「50年後の国土への戦略」

50年後の日本- 減災をバネに律動的な成長と進化を目指す「くに・マチ」づくり



岡田憲夫
論説委員
関西学院大学
災害復興制度研究所長、
総合政策学部教授

確定未来としての50年後

大変な難題を引き受けたものだ。ただ50年というずいぶん先のことも、いくつかは確実なことがある。「確定している未来(の一部)」があるのだ。そこから糸口を見出そう。

「完全に確定」とは言わずとも、「ほぼ確定している」未来と言えばまず人口。これから先、人口は減り続け、2060年ごろにはなんと8600万人程度に落ち込んでいるという(内閣府平成24年版・高齢社会白書)。戦後10年ほど経った1950~60年ごろの水準に引き戻される(退潮する)ようなものである。しかし決定的に違うことがある。今から50~60年前の高齢化率は5%程度であったが、50年先は40%になると見込まれている。超高齢化社会に突入しているわけだ。(大幅な移民政策を国がとれば話は別であるが、それはそれで「くにの形」を大転換することになるだろう。) なかなか50年後は陰しく、日本民族がまったく経験したことのない領域での挑戦が求められるわけだ。

日本列島に住み続ける限り避けられない確定未来と言えば、巨大災害の発生を忘れるわけにはいかない。50年月には東海・東南海・南海地震が西日本の太平洋沿岸を中心として起こっている可能性がきわめて高い。東日本大震災が起こったことを受けて、格別に大きな(ただならぬ)南海トラフ地震も「ありえないことではない」こととして、国を挙げて公式に取り組んでいくことも始まっている。さらに、昨今の巨大化した台風の頻繁な到来や局所的に集中する異常な豪雨のリスクが列島のすみずみに現実味を帯びてきている。地球レベルの気候変動は50年後の日常化の姿かもしれない。

いささか減入るばかりの「未来像」のオンパレードだ。日本の未来に光は差さないかのように。「とても出口はない、そこまでは無理」と最初から断念する地域や人々が多く出てくることを私は恐れる。いや、そうあってはならない。この確定未来像は、直視すべきフレームワークではあるが、荒波を逆手にとって律動的に乗り越え、社会が進化する。そのためには「50年後のくに・マチの絵姿」を描き、希求し、今から少しずつでもその姿に近づき、引き寄せていく。そのような発想転換と行動力が求められるのである。その原動力を減災に託するのだ。そのためにはハードでガンガンに強くすれば良いということではない。トップダウン的やり方にも限界がある。ともかく被害をまったくゼロにすることは不可能と見定めた上で、最悪は回避する。限られた資源の下で、あの手この手で被害を軽減するという「減災」へのガバナンスがまったなしに求められている。日本が総力を尽くしてチャレンジしなければならない「くに・マチ」変えの「事起こし」でもある。

減災を加減して創造と変革のバネにする

実は「減災」はきわめてポジティブ(加法的)な営みでもある。「減災」とは「加減する」ことに妙がある。このような前向きで創造的な意味に再解釈しよう。たとえば50年後の超急激な「人口減」、高齢化に伴う「社会の活力減」はある意味「災害」である。それを放置するだけでなく好ましからぬ「減」>が進行する。しかし好ましからぬ「減」>を、創造力と行動力を発揮して前もって好ましい「減」>に転じて加減していく。それを粘り強く続けていく。結果として長期的に見て社会が革新される。これはまさに「減災」の妙に通じるのではないか。減災を創造と社会変革のバネにするのだ。

メリハリの効いた空間を整える

発想を転換しよう。人口減が全体として進行する社会は、20世紀の「都市の過密化」と「農山村の過疎化」がもたらした「空間ストレス」が自然に減っていく過程にあるとも言える。これを「望ましく加減していく」ためには、50年先のくに・マチの姿を共有し希求する強い意思と自立的な地域・コミュニティが不可欠だ。その上で、減じた分に見合う濃密な活動空間をプラスとして生み出すようなメリハリの効いた空間計画をじっくりと熟成させて行かねばならない。

20世紀型のくに・マチの近代化の澱(おり)を減災する

20世紀が「とりあえずは」という形で置き去りにしてきた数多くの空間ストレスはまぎれもない「災害リスク」である。醜悪で無秩序な都市や農山漁村の景観、野放図で、自然に過度に挑戦的な開発・造成や、土壌の汚染などがそのようなリスクとして挙げられよう。20世紀に間に合わせ的に築いてきた多くの土木インフラの老朽化なども新たな災害リスクとなっている。来るべき50年はそのような20世紀型のくに・マチの近代化の澱(おり)を減災する50年にするのだ。

本論で「くに・マチ」としてきた日本列島の生活・生産空間は、「全国」のレベルから、近隣の集落(コミュニティ)レベルまで多層的かつ多層的でありうる。50年先のくに・マチの姿を共有し希求する強い意思は現実的にはどのようにして生まれ、維持できるものか?

ずばりの「正解」はない。しかしいろいろなレベルで当事者が参画・関与する形で「社会的成立解」を見出していく。そのためには現在の社会制度・社会システムが変革されなければならない。成功モデルを生み出す人材も育てなければならない。

それは可能かと問うことは愚問である。できなければ50年後の日本は世界から取り残された孤島と化するのだ。そして22世紀初頭の歴史家はこう書くであろう。「東日本大震災という形を取って大自然が投げかけた日本のくに・マチへの警告をなぜ真剣に活かすことができなかったのか」と。いや、賢明な日本人はその愚は冒すまい。ならば今から、1年、1年、ぶれない意思の下に積み上げる50年の事起こしをする。そこかしこで、必ず日本は変わるはずである。